

# 思いは同じ 熊本応援

## ここにいるよ

### 沖縄子どもの貧困

## 第4部 支援の現場から (12)

### 子ども食堂①

子ども支援の協力で、「ふじとみ子ども食堂」「子どもキッチン・ブルービー」など県内11カ所の子ども食堂に分配される。

沖繩市のNPO法人ももやま子ども食堂は24日、熊本市の社会福祉法人が運営するフードバンク熊本に向けて食料品や生活用品などを郵送し、4月の熊本地震発生後、ももやま子ども食堂が呼び掛けた「オモツナ(思いやり)熊本地震支援プロジェクト」で、県内の個人や団体から寄せられた支援物資だ。内容は米、ミネラルウォーター、乾ミルク、缶詰、お菓子、紙おむつ、除菌シートなど。地震後、熊本への郵便物は増えにくい状況が続いていたが、受け入れ態勢が整い、発送可能になったという。

支援金は約1万3800円で集まった。熊本市子ども未来部や

とも支援課の協力で、「ふじとみ子ども食堂」「子どもキッチン・ブルービー」など県内11カ所の子ども食堂に分配される。フードバンク熊本と子ども食堂を運営する社会福祉法人福苑会、熊本健康医療の専任理事兼副理事長は「仮設住宅に入居し、避難所や車中で暮らしている被災者がまだまだ多い」と状況を説明。「フードバンクには毎日のように利用団体が食料を求めに来る。沖縄からの支援に感謝したい」と話す。

ももやま子ども食堂の平林典太郎理事長は「最近の大雨洪水や土砂災害も心配。これ以上被害が広がらないことを願っている。物資と支援金を熊本市に向けて役立ててもらえればうれしい」と

話す。「地域は違っても同じ子ども食堂同士。1回で終わるのではなく、今後つながりを継続していきたい」。世間は締め切りが同じなのに運営している仲間。「一方通行ではなく、お互いの困りごと相談や共同イベントを開催できるような、子ども食堂同士の横のつながりをつくりたい」と構想を語る。

平林さんは地震発生後に現地に入り、避難所などで水ランチャイブ活動した。活動の中で子ども食堂関係者と知り合い、沖縄から可能な支援を構築してきていた。今後、つながりを継続したい。世間は締め切りが同じなのに運営している仲間。「一方通行ではなく、お互いの困りごと相談や共同イベントを開催できるような、子ども食堂同士の横のつながりをつくりたい」と構想を語る。

ももやま子ども食堂は昨年5月、県内初の「子ども食堂」としてオープンした。原食店(原)

## 地域越え横のつながり模索



熊本に送る支援物資を準備するももやま子ども食堂の平林典太郎理事長(右)、白坂敦子副理事長＝沖縄中野児童

過(す)すやむひどりぼつちで食べると子たちがみんなで食事ができる場所として、市内の有志者が立ち上げた。現在、県内に約20カ所あるといわれる子ども食堂の先駆けとなった。

4月からは場所を近くに移動。毎土曜日の準1階部分を1年間続けてきたが、最近毎日曜日も開け始めた。

「日曜も来たい」と言った子どもが「白坂敦子副理事長が「考えにくわ」と言えなかった。避難所の子が「考えにくわ」と真剣な目で見つめてきた。

「できない」とは言葉で言いにくい。白坂さんは笑う。水ランチャイブによる運営は決して楽ではないが、毎週通ってやることも徐々に本音を許すようになった子どももいる。そんな子どもたちの姿が継続する力になっているという。「困りごとを抱えている子どもを助ける」という思いが、この場所を運営している平林さんや副理事長に伝えている。子どもが目の前にいるのを放っておけない。できることを続けていきたい」。食事提供はほかにとまらず、活動の幅を広げていく方針だ。(子どもの貧困1取材班・田嶋正雄)＝随時掲載